

虐待防止の観点からの文献紹介

公衆衛生看護学部 山田 和子

「被虐待児の情緒と行動」

斉藤 学. 被虐待児の情緒と行動. 児童虐待〔臨床編〕.

金剛出版. 1998;30-37

I. 目的

全国養護施設に入所中の児童のうち被児童虐待と思われるものを抽出し、性、年齢を一致させた養護施設入所児（統制群）と比較し、被虐待児童の情緒面、行動面の特徴を捉えること。

II. 方法

調査対象は1991年3月から1992年2月までの1年間に日本全国535の養護施設に入所した児童5,649名である。

調査方法は1992年2月に全国養護施設協議会の調査研究部を通じ、各養護施設の職員に以下の作業を依頼した。①上記5,649名に該当するものの中から、“児童虐待を体験した児童”（以下「被虐待児」と呼ぶ）を抽出し、被虐待児用の個人票に彼らと彼らの親に関する情報を記入すること。②同じ母集団から、被虐待児児と性、年齢が一致し、“児童虐待を受けていないことが明確な児童”（以後「統制児」と呼ぶ）を各被虐待児毎に1名選び、彼らと彼らの親について統制児用の個人票に記入すること。③各施設の在籍児童数とその中で被虐待児の割合などを聴取するための施設票に記入すること。

調査票の記入者（養護施設の教員）を対象として「調査票記入の手引き」を作成し送付した。「調査票記入の手引き」には、児童虐待の定義、類型分類、児童の情緒・行動障害に関する解説と判断基準、親の精神障害についての解説と判定基準、などが含まれている。

III. 結果

1. 調査票の回収

施設調査票を返送してきたのは、382施設（回収率71.4%）で、このうち119施設からは調査期間中に被虐待児と認定できる児童の入所はなかったとの回答があり、263施設から被虐待児の有効個人票576票と統制児の有効個人票263票が回収された。

2. 対象児の比較

「被虐待児グループ」と「統制児グループ」について、男女比、平均年齢、平均在籍期間を比較したが有意な差はなかった。養護施設への入所理由について比較すると、「被虐待児グループ」では「児童虐待」が42.5%、「遺棄・置き去り児」が15.6%を占めるのに対して、「統制児グループ」ではこれらを理由にして入所した児はいなかった。

3. 虐待について

「被虐待児グループ」について、虐待の類型別にみると、主たる虐待とされたものは身体的虐待207名（35.8%）、心理的虐待117名（20.2%）、性的虐待14名（2.4%）、ネグレクト241名（41.6%）であった。加害者と認定された者（複数回答あり）は実母が53.0%と圧倒的に多く、次いで実父27.8%、義父8.2%、義母5.4%、その他5.6%の順になっていた。

虐待類型別に年齢層をみると、身体的虐待のほとんどは小学生の年齢にみられ、ネグレクトも同様であったが、心理的虐待では小学生から中学生にかけての年齢層の割合が高かった。性的虐待のほとんどは中学生以上を対象に生じていた。性比（男児数/女児数）は身体的虐待で1.69と男児に多く、心理的虐待で1.05、ネグレクトで1.34、性的虐待は女児のみであった。

4. 情緒・行動上の問題

表1は養護施設入所後の各児童の情緒・行動上の問題・障害を「被虐待児グループ」と「統制児グループ」で比較したものである。入所直後の「被虐待児グループ」では67.4%に何らかの情緒・行動障害がみられ、「統制児グループ」における同種の問題行動の発生頻度（44.9

%)より有意に高かった。内訳をみると、入所直後の「被虐待児グループ」では「知的発達の遅れ」「仲間の子どもとの関係が結べない」「多動・落ち着きのなさ」「怒りっぽさと反抗」「多食・多飲」「爪かみ」「その他の常同症・習慣障害」「性への強い関心」「他の子をいじめる」などの項目で、「統制児グループ」より有意に多かった。

こうした、入所直後における被虐待児の情緒・行動の発生頻度の高さは調査時点に持ち越されており、「被虐待児グループ」の56.0%は何らかの問題行動を示しているのに対して、「統制児グループ」では31.9%に過ぎず、有意な差があった。内訳をみると、「統制児グループ」との比較で有意差が消えるのは「性への強い関心」だけであった。一方「違法・犯罪行為」は調査時点になって「統制児グループ」との間に有意差が生じていた。

IV. 考察

心的外傷によるPTSD(心的外傷後ストレス障害)には多動性、過剰覚醒性と不眠、爆発性憤怒、不安恐慌、フラッシュバックなどの急性・侵入性反応と呼ばれるものと、感情鈍麻、対人関係障害と自閉、社会的孤立、抑うつなどを内容とする慢性・感情鈍麻性反応と呼ばれるものがあるという。親世代からの虐待が、児童の心的外傷として深刻なものであることは言うまでもなく、彼らの情緒・行動上の特徴には、PTSDの影響が様々な形で影を落としているものと思われる。

V. コメント

虐待により児童に様々な情緒・行動上の問題が生じる可能性がある。本文献で明らかにされた被虐待児に多い「多動・落ち着きのなさ」「怒りっぽさと反抗」「他の子をいじめる」「違法・犯罪行為」などの情緒・行動の問題は思春期の暴力行為と関連している可能性もあり、今後、暴力行為の要因を検討する際には、被虐待歴を要因の一つとして検討していく必要がある。

なお、我が国では児童虐待についての研究は緒についたところであり、全国的な児童虐待の実態に関する調査研究も充分ではなく、また、虐待による長期的な心理、行動への影響に関してもケースコントロール研究などによる検討がなされていない現状である。

表1 被虐待児の情緒・行動上の問題

	A. 入所直後		B. 調査時	
	被虐待児 [M/F]**	統制児 [M/F]	被虐待児 [M/F]	統制児 [M/F]
N	579 [1.3]	263 [1.4]	579 [1.3]	263 [1.4]
問題あり	67.4 [1.4]**	44.9 [2.3]	56.0 [1.5]**	31.9 [2.2]
知的発達の遅れ	18.5 [1.1]**	8.4 [3.4]	14.2 [1.2]*	8.0 [3.2]
仲間の子どもと関係が結べない	17.4 [1.2]**	6.8 [2.6]	7.1 [1.7]*	3.0 [-]
減黙ないし選択性減黙	4.5 [1.2]	4.2 [1.8]	1.7 [1.5]	1.1 [2.0]
多動・落ち着きのなさ	19.5 [2.4]**	9.9 [12.0]	14.0 [2.9]*	7.2 [8.5]
過度のなれなれしさ(年長児)	5.4 [1.2]	3.0 [1.7]	3.6 [1.1]	1.9 [1.5]
著しい無気力(乳幼児)	2.1 [0.7]	0.8 [-]	0.2 [-]	0.8 [-]
怒りっぽさと反抗	13.6 [1.5]*	6.1 [3.0]	9.7 [1.3]*	3.8 [4.0]
違反行為と犯罪行為	7.1 [1.9]	5.7 [4.0]	6.0 [1.1]*	2.7 [2.5]
著しい引きこもり	3.5 [1.2]	1.9 [1.5]	0.7 [1.0]	0.4 [-]
不眠	1.2 [0.8]	0.8 [-]	0.7 [3.0]	0.4 [-]
夜驚	1.0 [0.5]	0.0 [-]	0.2 [0.0]	0.0 [-]
遺尿・夜尿	16.6 [1.1]	13.3 [1.5]	12.6 [1.2]	9.9 [1.9]
多食・多飲	7.4 [2.9]**	0.8 [1.0]	3.5 [2.3]*	0.8 [1.0]
爪かみ	6.2 [1.6]*	2.7 [6.0]	4.1 [1.4]*	1.5 [3.0]
指しゃぶり	4.7 [1.3]	5.3 [1.0]	3.5 [0.8]	3.8 [0.7]
抜毛癖	1.0 [0.2]	0.4 [0.0]	0.5 [0.5]	0.0 [-]
その他の常同症・習慣障害	2.2 [1.6]*	0.0 [-]	1.7 [2.3]*	0.0 [-]
吃音(どもり)	0.9 [4.0]	0.8 [1.0]	0.5 [-]	0.4 [-]
チック	2.8 [1.7]	1.5 [3.0]	1.6 [2.0]	0.8 [-]
性への強い関心	3.8 [1.0]*	1.1 [2.0]	3.5 [0.7]	2.7 [1.3]
手洗い強迫などの強迫行為	0.2 [0.0]	0.0 [-]	0.2 [-]	0.0 [-]
ひきつけ(てんかんを含む)	0.9 [1.5]	1.1 [-]	0.5 [0.5]	0.4 [-]
他の子をいじめる	6.7 [2.0]*	2.3 [2.0]	6.4 [1.6]*	3.0 [3.0]
他の子にいじめられる	6.7 [1.8]	5.3 [6.0]	4.3 [1.5]	3.4 [8.0]
その他	5.9 [1.4]	4.2 [2.7]	6.6 [1.4]	4.2 [1.8]

注) 複数回答

男児対女児比: [1.0]=男女同数、[>1.0]=男児数>女児数、[<1.0]=男児数<女児数、[0.0]=男児数0、[-]=女児0及び男女児とも0

χ²検定:** p<0.005 * p<0.05

虐待防止の観点からの文献リスト

公衆衛生看護学部 山田和子

- 1) 小林寿一. 犯罪・非行の原因としての児童虐待—米国の研究結果を中心にして—. 犯罪と非行. 1996 ; 8 : 111-129
- 2) 梶山有二,香川和子. 虐待されて入所した子どもの経過調査—身体発育変化と情緒的問題—. 第47回日本小児保健学会講演集. 2000 : 484-485
- 3) C.S.Widom, The Cycle of Violence, Science, 1989 ; 244 : 160-166,
- 4) C.S.Widom, The Cycle of Violence, National Institute of Justice Research in Brief , U.S.Department of Justice 1992
- 5) C.S.Widom, Victims of Childhood Sexual Abuse- Later Criminal Consequences, National Institute of Justice of Research in Brief , U.S.Department of Justice ,1995
- 6) H.B. Kaplan, Deviant Behavior in Defence of Self, New York, Academic Press, 1980
- 7) K.A. Dodge, J.E.Bate, & G.S.Pettit, Mechanisms in the Cycle of Violence, Science, 1990 ; 250 : 1678-1683
- 8) 岩井宜子. 児童虐待とその対応策. 犯罪と非行. 1999 ; 120 : 4-28
- 9) 堤賢,高橋利一,西沢哲. 被虐待児調査研究—養護施設における子どもの入所以前の経験と施設での生活状況に関する調査研究. 日本社会事業大学社会事業研究所年報. 1996 ;
- 10) 小笠原彩子. 少年事件からみる児童虐待問題について. 世界の児童と母性. 1997 ; 42 : 56-59
- 11) 西沢哲. 子どものトラウマ. 東京 : 講談社. 1997
- 12) 西沢哲. 子ども虐待. 東京 : 誠信書房. 1994
- 13) 内山絢子. 児童虐待の類型別特性に関する分析. 科学警察研究所報告書 防犯少年編. 1994 ; 35
- 14) 奥山眞紀子. 虐待された子どもの心理と行動. 児童心理. 1994 ; 4 : 23-30
- 15) 萩原玉味,岩井宜子編著. 児童虐待とその対策—実態調査を踏まえて—. 東京 : 多賀出版,1998

分担研究

10. キレる、ムカつく中学生の心身の状況と
食生活環境の関連に関する文献的検討

(分担研究者 梶本 雅俊)

キレル、ムカつく中学生の心身の状況と 食生活環境の関連に関する文献的検討

相模女子大学 学芸学部食物学科管理栄養士専攻 栄養指導第二研究室 梶本 雅俊

中学生の心身の状況特にキレル、ムカつく、ストレスの心理状態と栄養や食生活環境の関連に関する直接的報告や側面からの研究文献は常にすくない1-5。ここでは原著にこだわらずキーワードを検索し直接対象とした日本の報告をリストアップした、また関連分野の著書や報告もあげ指摘されたメカニズムや事実をあげ原因と対策の共通可能性を検討した。その原因の主なものには栄養素摂取によるもの 血糖、のようにマクロ栄養素から、アミノ酸、カルシウム、マグネシウム、ビタミンb1のようにミクロな栄養素があげられた。また朝食の欠食夜食など食べ方のタイミングや行動リズムの関係もあるとされた。この関連の可能性について基礎的関連の報告は多い。

1 兵庫県健康福祉部健康増進課：船本正明、山本一市、藤田一美、沖本明美、一色美千恵、水谷恵、梶本雅俊、三戸秀樹、村上恵子：「キレル」、中学生の心身ストレスと食生活環境等の関係要因について

兵庫県保健所栄養改善活動に関する調査研究報告12年3月、p30-46、

食事が原因であるとは決定できなかったが、ストレスやフラストレーションのある子供の関連はみられ、摂取食栄養量はむしろおおかった。

2 唐津保険所 佐賀県福祉保健環境部医務課：キレル、ムカつく中学生の心身の状況と生活に関する調査食生活環境を中心に：平成11年度地域保健対策推進調査研究事業報告書 p44-60、平成12年9月

いろいろ感のある子供は食品摂取パターンが異なり加工食品や、ファーストフード、インスタント食品

清涼飲料水の摂取が多く関連が強く指摘された。

3、大沢博：子供も大人もなぜキレル、ブレーン出版 1998

低血糖、砂糖摂取、ミネラル、ビタミン、欠乏が原因であると指摘

この著書の関連の文献：Schauss,A 栄養と犯罪行動、

大沢博著：食原性症候群、低血糖症、心理栄養学 ほか

4、梶本雅俊；最近の「切れる」子供たちペットボトル症候群と攻撃性；新宿区くらしの情報。1998

切れる子は清涼飲料水の摂取に関連があり、外国論文の引用から朝食の欠如がインスリン分泌異常を起こしひいてはアドレナリンの分泌また容易に怒る関連の指摘、

5 佐々木登代子、古林範子、梶本雅俊、鈴木妙子、古林範子、慢性腎不全（血液透析）患者及び糖尿病患者における食に関するストレスパターンについて、第43回日本栄養改

善学会. 講演集. 東京. 1996 : 255

6 古林範子, 梶本雅俊, 鈴木妙子, 佐々木登代子. 病院における栄養指導の効果と食事自己管理のためのストレス評価. 第43回日本栄養改善学会. 講演集. 東京. 1996 : 255
こどもに限らず中高年も同様のメカニズムで切れる可能性がある。

7 鈴木雅子 : キレないこに育てる食事メニュー 河出書房

8 鈴木そのこ : キレルキレないは食できまる 祥伝社

7 その他食生活のリズムが精神の働きに関連する報告

青少年食生活研究会 代表 苫米地孝之助「青少年の食生活に関する調査研究」 昭和61年度伊藤忠記念 財団依託研究。

切れる子のベースライン調査として貴重な報告

中村丁次, 梶本雅俊, 上田伸男. 朝食と牛乳が健康指標に関する実験的研究. 牛乳・乳製品健康づくり委員会. 1991 : 1-44

フリッカー値が朝食形式でことなり神経の働きがことなる証明。

津久井保健所地域食生活対策推進協議会 : 思春期からの健康づくりについて 平成6年度報告

最近の子供の高学年になるほど夜更かしになり多くの健康問題がある。

矢口理恵, 田村須美子, 矢口理恵, 渡辺奈津子, 梶本雅俊, 佐藤加代子, 鈴木妙子, 山本照子. 食生活を中心とした思春期からの健康づくりについて (第3報) - やせ願望と健康状態, 食行動との関連 -. 第43回日本栄養改善学会. 東京. 1996 : 210

山本照子, 梶本雅俊, 鈴木妙子, 佐藤加代子. 小学生高学年における健康意識と食行動の関連. 第43回日本栄養改善学会. 講演集. 東京. 1996 : 227

田村須美子, 矢口理恵, 若林良孝, 升井孝子, 梶本雅俊, 佐藤加代子, 鈴木妙子. 地域における公衆栄養活動の展開 (第1報) - 地域保健と学校保健の連携について -. 第56回日本公衆衛生学会総会抄録集. 神奈川. 日本公衆衛生雑誌. 1997 : 1316

田村須美子, 矢口理恵, 渡辺奈津子, 梶本雅俊, 佐藤加代子, 鈴木妙子, 山本照子. 食生活を中心とした思春期からの健康づくりについて - (第2報) 健康状態と行動との関連 -. 第43回日本栄養改善学会. 講演集. 東京. 1996 : 210

厚生科学特別研究事業

思春期の暴力行為の原因究明と
対策に関する研究

平成 13 年 3 月発行

主任研究者 小林 秀 資

印刷所 株式会社 まほろば